

子供と向き合い、現場から生まれた知恵

—橋詰先生インタビュー—

第2回 ロコミで広がった教育相談の日々

第1回では、能力育成部の蓄積を土台に、視覚認知トレーニングと書字読字の指導の工夫の「二本柱」が生まれるまでの経緯をお聞きしました。第2回は、教育相談がどのように広がっていったか、保護者・医師との連携、そして遠方のお子さんへの支援のエピソードをご紹介します。橋詰先生が大切にしてきた「まず話を聞く」という姿勢の意味についても伺いました。

1 医師からの紹介とロコミで広がった相談

【橋詰先生】

印象に残っているのは、ロコミでどんどん広がっていったことですね。ドクターがお母さんに紹介してくれ、また、お母さんの間で、ロコミで広がっていきました。北海道教育大学の専攻科での卒業論文を発表する会に普通の教員も発表できる機会があり、私は「教育相談でこんなことをやって、こんな風に効果がありました」とまとめたものを発表したんです。それが厚生病院に伝わり旭川医大のドクターの耳にも入ったらしく、「盲学校で何かやっているみたいだから、役に立つかわからないけれど行ってみる？」と患者さんに紹介して下さる先生がいらっちゃって。

【佐藤】

当時、フロスティグドリルのトレーニングによって視覚認知が向上することに、ドクターが驚かれたそうですね。

【橋詰先生】

発達系の小児神経や小児精神を専門とする先生がまだ少なかった時代でしたね。だから、盲学校の取組が注目されたのかもしれませんが。視覚認知の相談数が視覚障害の相談数を逆転するくらいになっていきました。

▶ 当時はまだ「発達障害」という言葉が一般的でなく、支援の窓口や方法が分からず困っている親子が多く存在しました。盲学校の支援が、そのような家族にとっての貴重な相談窓口となっていたのです。

2 「うん、うん」と聞くだけ—保護者対応の真意

【佐藤】

当時、教育相談でお子さんの実態把握を終えて、保護者対応をされている橋詰先生のところへ戻るといつも和やかな空気が流れていて、どのような対応をしているのか不思議でした。伺ってみると、「お母さんの話をただ『うん、うん』と聞いているだけなんだけどね……」とおっしゃっていたのが印象に残っています。

【橋詰先生】

まだこちらがよく分かっていなかった時期だったのもあります。本当に模索していた頃だったので、まずは話を聞いて「じゃあ試してみますか？」という感じでした。今なら逆に質問して、「きっとこの辺の視覚認知が弱いと思うので、こんな方法をトレーニングしたり学習したりしたらよいかもしれないから、やってみますか？」と提案できますが、当時はノウハウもそんなにたまってなくて。取りあえずやってみる、という手探りの状態でしたね。

▶ 「まず聞く」ことは、手探りの時期ゆえの面があったが、結果として保護者との信頼関係を生む大切な姿勢となりました。ノウハウが蓄積された後も、その根本にある「対話」の重要性は変わりませ

ん。

3 遠方のお子さんの事例—メールで続けた支援

【橋詰先生】

旭川から遠い道北の町の LD（学習障害）のお子さんのケースが印象深いです。来校に車で 3 時間半はかかるので、実際に来ていただいたのは 2、3 回なんですけど、お母さんが家で試してみて「こうでした」とメールで報告してくれ、それにアドバイスをするということを繰り返しました。本当に典型的な LD のお子さんで、最終的に漢字が完璧に書けるようになったわけではないんですが、少し気持ちを楽にしてあげられたかなと思います。

【橋詰先生】

当時の担任の先生が、100 点取るまで何回でも漢字のテストをする方で、その子がすごくつらい思いをしていました。それが、一時的であっても覚え方の工夫でクリアできたんですよ。その子は数学や理科など非常に頭が良く、今は金属メッキ関係の会社の研究職に就いています。今でもときどきお母さんからメールをいただきます。

【佐藤】

時代を先駆けていたんでしょうね。開拓していくようなモチベーションをもって実践を重ねられていた。そして時代も動いていた。

【橋詰先生】

当時お付き合いのあったお母さんのうち 2 人が、ご自身で放課後等デイサービスを立ち上げ、もう一人は「親の会」を立ち上げられました。まだ発達障害という言葉が一般的ではなかった時代ですから、親御さんもいろいろなところを探し回りながら盲学校に行き着いたという感じだったのですね。

▶ 地域のニーズを先取りした教育相談の実践は、保護者の主体的な動きへとつながっていきました。「救われた」経験が、次の世代への支援者を生み出したのでしょう。

◆ 次回予告（第 3 回）

第 3 回は「王道はあるが、王道だけでは救えない」をお届けします。多くのケース経験から生まれた「試す」マインド、子供と一緒に作り上げる指導観、そしてオンデマンド研修への全国からの反響についてお聞きします。

インタビュー構成：北海道札幌視覚支援学校 小松太一郎・佐藤暢洋